

渡辺復興大臣宮城県訪問時ぶら下がり会見録  
(平成31年2月17日(日) 15:01~15:08 於) 宮城県仙台市)

1. 発言要旨

本日、午前中は東京都において、福島県から首都圏に避難されている方々との意見交換会に参加し、午後はここ宮城県で開催されました「新しい東北」交流会において、「『新しい東北』復興・創生顕彰」、「企業による復興事業事例」顕彰式及び「ボランティア交流会」に参加しました。

「『新しい東北』復興・創生顕彰」等は、被災地の産業・生業の再生や、コミュニティ形成等に尽力されている方々の意欲的な取組を発掘、後押しするため開催しており、本日は16団体を表彰いたしました。

また、初めての取組として、東日本大震災からの復興におけるボランティアを考えるとということで、「ボランティア交流会」を開催し、これまでボランティアとして活躍された方々にお集まりをいただいて、活動の振り返りや今後伝えていくべき知見等について、御議論をいただいたところでございます。

これら顕彰やボランティア交流会を通じて、復興に当たっては企業、NPO、大学、その他関係団体等の皆さんの御活躍や、ノウハウが欠かせないと改めて実感したところでございます。

引き続き現場主義を徹底し、現地の方々や復興に御尽力されている方々に御意見を伺いながら、一日も早い復興の実現に向けて全力で取り組んでまいります。

2. 質疑応答

(問) 今回、ボランティアの交流会は初めての開催でしたが、災害の多い日本でボランティアのそのノウハウがきちんと引き継がれていくということはますます重要になってきていると私も感じるのですが、こういった知見を共有する場について、改めてその重要性について、大臣の御見解を伺いたいです。

(答) まず、私自身とボランティアの関係、つながりについて、若干触れさせていただきたいと思えます。

NPO法案ができたのが平成10年であります。そのときに直接私に関わっておりました。そして、その後、日本が提唱した国際ボランティア年に、国連において、私自身がクロージングセッションで挨拶をさせていただいたということがございまして、以来、ボランティアとの関係については、今後大変重要な役割を担っていくだろうということを常々思っておりました。

その中で、今回東日本大震災から、発災から8年経とうとしてお

ります。その間、ボランティアの皆さん方の様々な御努力によって復興は成し遂げられてまいりましたし、さらには被災者の皆さん方と寄り添っていき、こういったボランティアの活動が大変重要であるということをご認識しております。

今まで、そういったボランティアに携わってきた人たちと連携して、様々な情報を共有するという場がございました。こういった人たちとの連携プレーというのが大変重要だということで、今回初めてでございますけれども、そういった場を設定させていただいて、お互いにこれからのボランティアのあるべき姿等を御議論していただくということにしたわけでございます。

(問) 午前中の交流会に関しまして、何かお感じになられたことなど、御感想をお聞かせください。

(答) 参加された方、避難者の皆様は、現在の暮らし向き、避難元との地域のつながりや、そして、また福島への帰る、そういったお気持ち、こういったところをお考えについて、率直にお伺いをしたところでございます。

相談の対応や交流会など、支援の継続を要望する、こんなことがあります。当然、現在自分の生活が東京近辺にあるわけでございますけれども、その生活と、さらには帰りたいという気持ちもあると、私自身もそのお話を聞いてありました。でも、その帰りたい、でも帰れない、こういった心の葛藤というものをつくづく感じさせていただきました。

これは私にとりましても、できるだけ早く帰れる環境をつくっていく、これが大変重要だというふうに思っております。具体的な様々な課題も言われましたけれども、そういった課題の整理を今後もしていって、皆さん方が帰りたいければ帰れるような環境をつくるというのが最大の役目ではないかな、そのように思っております。

(問) 課題、色々あったと思うのですが、その中で一つこういう課題があって、それを今後こういうふうに生かそうというものがもし何か具体的にあれば。

(答) 一つは、教育の関係がございました。その方は子供の教育を考えていったときに、それではふるさとに戻ろうとしたときに、教育環境が本当にあるのかな、できているのかなということでした。こういった課題をやはりしっかりと聞いていくことが大事だというふうに思います。

さらには、現在もコミュニティー、団体の皆さん方との連携ができておりますので、今までの不安な要素というのはそういった団体とのコミュニティーを凶ることによって解消されているといったことがありますので、現在の状況の中でしっかりと生活できる

環境をつくっております。

ただ、気持ちの上ではふるさとに帰りたいと考えておられると、つくづく私自身も感じました。

(以 上)